

節分の日にスーパーの寿司屋で、「恵方巻」という海苔巻きを求める行列があって、最後尾という札を持った店員が立って、整理していました。驚きでした。北北西(?)に向かい、これを食べると、「鬼は外、福は内」の呪文が叶うとのことで、鬼除けの縁起物のようでした。

幼い頃に、『桃太郎』や『一寸法師』のおとぎ話を聞かされ、鬼は邪悪で、不法で、暴力的で、人間に害を与える恐ろしい生き物、退治しなければならない存在である、と教え込まれました。それなのに、外遊びを楽しめる年頃ともになると、「鬼ごっこする者、寄っといで！」と掛け声を掛け合っては、隣



近所の餓鬼どもが集まり、「ジャン・ケン・ポン」をして鬼を決め、鬼ごっこ、かくれんぼ、達磨さんが転んだ、かごめかごめ、ハンカチ落としなど、夢中になって遊んだものです。ドジな、不運な子が二回目以降、鬼になるのです。だから、鬼にはなりたくない、でも、鬼なしには遊びが成り立たないという日常を過ごしていました。鬼という言葉は、身近で、誰でもこの鬼にはなりました。

節分ともなれば、「鬼は外、福は内」との掛け声で「豆まき」という楽しい祭りも行われます。鬼になって必死で豆を拾いました。幼稚園の子ども達は、鬼は相手を威嚇する、恐ろしい、不思議な魔力がある！と思い、その力が欲しくて、♪鬼のパンツはいいパンツ！強いぞ！強いぞ！虎の毛皮で出来ている！強いぞ！強いぞ！♪ と、大喜びでガッツポーズを取って踊り、歌います。

鬼の形相と言え、能の般若の面を思い浮かべますが、これは女の顔で、妬み、苦しみ、怒りを表す鬼女の面です。しかも怨霊、死者の面です。鬼の姿に、死後の世界を畏れ、死者の霊に思いを馳せるのです。

また、私たちは、日常的に「鬼に金棒」と言って褒めたり、「鬼の居ぬ間に洗濯」と言って留守を楽しんだり、最近はしっかり者なのに「鬼嫁」と呼ばれたり、結構、鬼という言葉が使われています。



でも、鬼は世界的な存在ではなく、「日本の妖怪」です。聖書には出てきません。口語訳の旧約聖書イザヤ書に鬼神という言葉が2回使われていました。バビロンを、ただ、野の獣がそこに伏し、ほえる獣がその家に満ち、駝鳥がそこに住み、鬼神がそこに踊る。(イザヤ 13:21)、エドムを、野の獣はハイエナと出会い、鬼神はその友を呼び、夜の魔女もそこに降りてきて、休み所を得る。(イザヤ 34:21) と貶めまします。現在の訳では魔神という言葉に変わっています。他国人をこのように表現するのは戦争中の日本が「鬼畜米英」と言った表現と同じといえるでしょう。

私が不思議だなあと思うには、「魔」という文字の中に鬼がいます。また、私たちの最も大切な、目には見えない「魂」、その文字の中にも鬼がいます。漢字の妙を感じざるを得ません。漢字はなんと魅力的でしょう。「魅」という文字のなかにも鬼がいるのです。

誰でも、超人的な力、訳の分からない事態、恐ろしい謎めいた事態に対し、また、自分は受け入れられないと感じる邪悪、恐怖、残酷、死霊などに対し、「鬼のような…」という気分になるでしょう。また、人は鬼になってしまうこともある、と思わされます。昔、「悦子は どうして天邪鬼(あまのじゃく)なのか」と母がいつも嘆いていました。幼い私の中に鬼がいたのでしょうか。やはり、今も、私の中に、鬼がいると思わせられ、苦しいです。だからと言って恵方巻を食べたいとは思いませんが。